

大造り物が出来るまで⑤

材料の加工～部材づくり

山野から採ってきた自然の材料は、そのままでは使えません。切ったり、磨いたり、編んだり、柔らかくしたり、持って帰ってきてからの加工作業もとても手間のかかる工程です。各連合組のベテラン組は、慣れた手つきで松ぼっくりに穴を空けて首飾りを作ったり、竹を切ってその中に詰め物をしたり、かざらでジュータンのような衣装を編んだり、昔から見て覚えてきた技を駆使して、次々と美しい部材を作り出します。



子どもたちも、自分で考えて材料を加工します。



松ぼっくりの串団子。何百個も作ります。



町内総出で材料を加工。団らんの場にもなります。



木の根を利用して作られた恐竜の歯。



竹の部材は千個単位で用意されることもあります。



細かな細工も手を抜かずきちんと仕上げます。



切るだけでなく、大きさも均等になるように仕分け。



萩の葉を全部取るのはとても時間と根気のかかる作業。



油の入ったお湯で煮ることで材料を柔らかくします。



出来上がった部材が次々に取りつけられます。



自生するかざらを編み込んで作ります。



見事に仕上がったかざら編み。

大造り物が出来るまで⑥

肉付け

いよいよ最後の工程です。何日間もかけて集め、加工した杉の枝や竹、松ぼっくり、木の根、ススキなどの部材を出来上がった下地に、取り付けていきます。ひとつひとつが手作業で、差し込んだり打ち付けたりしていきます。巨大な大造り物全体を覆うには相当な時間がかかります。作業の途中で材料が足りなくなることがあります。連合組の中には材料の追加調達に奔走したり、前年の材料を大切に残して使うところもあります。



配置された竹の輪が美しさを放ち、出来上がりの素晴らしさを予感させる。



杉の葉を小さくカットし、1本1本差し込んでいきます。



まるで巨大な“ゆるキャラ”の着ぐるみのような仕上がりに。



肉付けが完了した龍の顔。素材の使い方が見事。



松ぼっくりを隙間なく貼り込むことで完成度がアップします。



夜を徹して最後の仕上げ。



丁寧な作業の積み重ねによって大造り物は生まれます。



素朴な造りながらも手の温もりが感じられます。



神社の紋も、立派に造り込まれています。



写真等と見比べながら顔の肉付けに熱が入ります。



松ぼっくりとライトが絶妙。